

論文の内容の要旨

十七世紀 十九世紀の日本思想・文化における神の觀念の諸相
否定的なものへの感受性の変容をめぐって

福井 裕之

近世思想史で神や天についての研究が行われる場合、古代を視野に入れた研究も存在する中世思想史研究とはちがって、全体的把握・包括的把握は後回しになりがちである。つまり、近世朱子学や徂徠学のみが比較の軸にとられ、「 (思想家)における天の觀念」、もしくは「 における神の觀念」といったかたちで研究が細分化されてしまっていると、隣接の個別科学との関係も断ち切られてしまっている。

もちろん、丸山真男、和辻哲郎、中村元など古代から近代までを広く研究した大家も存在する。しかし、彼らの思想史研究・比較思想は、民俗学・社会史などちがって、日本が歴史のごく早い段階で稲作単一民俗の国であったという前提に立ち、守り神の觀念や祖霊信仰の存在・影響力を非常に大きく見積もってきた。

また、研究事情自体からは視点を变えても、おそらく庶民・非研究者のレヴェルでは、近世儒教の神の觀念「天」は經驗合理主義的 近世儒教の觀念は經驗合理主義的であるがゆえに実は 本覚思想 として浸透していると考えられるが すぎて、仏教や陰陽道ほどには意識的な興味をもたれていない。少なくとも私見では、近世思想史は、とくに現代日本での景気停滞のなかで強まる、心霊的なものを求める庶民感覚からはよくもわるくも遊離しているように思われる。すなわち、經驗合理主義が靈感・占い商法に加担するこ

とはないことは「よい」が、それを求める心性にまったく冷淡なのは「わるい」だろうからである。

そこで、本稿の研究の目的は、古代からさかのぼって、そして民俗学・社会史などのいまやスタンダードとなった神についての観念の研究 おもに、崇り神、苦しむ神の観念についてのもの の成果を取り入れながら、十七世紀から十九世紀にかけての日本思想・日本文化における神の観念の変化・変遷を追うこと、そして日本社会・文化における神の観念の研究を、心霊的なものを求める人々の心に対して啓蒙的でもあり、民衆的でもあるものにする、こと、である。

本稿の「序論」(第一章～第三章)では、丸山真男、和辻哲郎、中村元などの研究の問題点をあきらかにし、桜井好朗氏、中村生雄氏、佐藤弘夫氏、黒田俊雄、平雅行氏などによる古代、中世の神の観念についての研究を参考にして、崇り神の観念、守り神の観念、苦しむ神の観念、罰する神の観念、心重視の平等主義的本覚思想、形重視の差別主義的本覚思想 という基本概念を提出した。そして、神の観念の変化にまつわる古代から中世までの日本思想・文化の歴史的動向を、否定的なもの(崇り、他者性、恨み、罪など)への感受性の変容 おおむね否定的な意味での変容 と規定し、この感受性の変容は近世以降にも継続する歴史的動向であるという仮説を立てた。

「 」(第四章～第九章)では、「天道」観念、「心だに」の句、鈴木正三、熊沢蕃山、西川如見、貝原益軒、伊藤仁斎などを対象とし、中世のあと、十七世紀では、「天道」という守り神 への一元化がかなり進みはしたこと、そしてそうではあるものの、十八世紀に比べるとまだまだその一元化は完全ではなく、ひとつの思想のなかにも、崇り神の観念、守り神の観念、苦しむ神の観念、罰する神の観念、心重視の本覚思想、形重視の本覚思想 への信仰、もしくはそれらへの理解が多様なかたちで存在していることを確認した。十七世紀においては、基本的には、「慈悲」から「仁」あるいは「正直」(家の自立、職分の励行)へ、個人的な愛から「家」への執着・崇拜へ、罰したり応じたりする神 から 守り神、本覚思想 へ、前世の因縁論から現世の天分論へ、移動から定住へ、焼畑農耕や肉食文化も許容しえた文化から稲作中心文化へ、と移行していく。しかし、それらのあいだで揺れ動いているのが、十七世紀の思想の特徴である。

「 」(第十章～第十三章)では、十八世紀において、荻生徂徠、安藤昌益、懐徳堂、後期水戸学などの儒教系知識人の思想では、「天道」観念に代わり、あるいは「天道」観念に加えて、不可知の「天」の観念が登場したこと、そしてアマテラスや「天道」に代表され

る 守り神 の観念や 本覚思想 とは異なる神の観念、否定的なものが淫祀・俗信として感受され、排撃されたことを確認した。別の言い方をすれば、十八世紀は、祖先崇拜の定着を意図した、近世権力による宗教統制・管理が効果をあげていく時期である。生の充溢・享楽、国や家の連続、通俗道德の励行、稲作定着民の文化を支える 守り神 の観念が圧倒的なものとなっていくのである。

「 」（第十四章～第十六章）では、守り神 の一元論に終始しがちな儒教系の思想とちがって、増穂残口、本居宣長、平田篤胤などの国学の思想では、儒教系以上に日本の古道を探究した結果、守り神 とそれ以外の悪神・心 崇り神 ・怨霊・天狗 との二元論によって世界が説明されること、つまり否定的なものへの鋭い感受性を示すこと、しかし、宗教的・文化的排外主義に傾倒することに加え、結局は悪神が 守り神 に馴致され、従属していくことを確認した。

「 」（第十七章～第十八章）では、石門心学 石田梅岩、手島堵庵、布施松翁、中沢道二 の思想と民衆宗教・運動 近世山岳信仰、黒住宗忠、なまず信仰、ぬけ参り、ええじゃないか、中山みき、赤沢文治、一尊如来きの、出口なお の思想とを、本覚思想 に関して対照的な関係にあるものとして把握した。つまり、前者は 形 重視の差別主義的 本覚思想 であり、後者は 心 重視の平等主義的 本覚思想 である。なお、民衆思想においても、守り神 と 崇り神 のどちらを信じているかは一様ではなく、さまざまな事例が見られたこと、しかし、近世以降の大勢に反して、赤沢文治、一尊如来きの、出口なおなど、はっきりと 崇り神 を信仰している事例もあることを確認した。彼ら・彼女らの 崇り神 信仰は、知識人のものを含めて 守り神 信仰が大勢を占めているなかでは異彩を放っている。

「 」（第十九章）では、西周、加藤弘之、福沢諭吉、内村鑑三の思想は、肉食禁忌・性差別含めて俗信・迷信を否定するという点では、効果をあげたものの、しかし、本覚思想 や 守り神 の観念と根本的に対立するものではなく、むしろそれらに対して保守的であること、そして十八世紀以来の歴史における支配的な展開である通俗道德の励行論、祭政一致論、国家神道を批判することはなく、むしろ、それを自明の前提として黙認していったという観が強いことについて論じた。また、西洋を夢見て日本の未来にあかるい期待をいだくばかりで、否定的な過去や多様性について反省することはない。

以上で確認してきたのは、十七世紀以降の神観念と精神世界の変化の特徴が、まず、崇り神 観念とその変成の系譜 怨霊、妖怪、応じたり罰したりする神、苦しむ

神を忘却し、守り神の觀念や本覺思想を強めてきたことにある、ということである。その特徴の背景には、戸籍をもち墓に石碑を立て定住するがゆえに、人々は、「家」の存続意識や祖先崇拜イデオロギーを強め、水田稲作農耕を生活の中心に考える。近世、とくに十八世紀以降は、そういう意味で、定住・家・祖霊・米に重きを置く稲作定着民の時代であったということが存在していよう。

稲作定着民の時代が導いたと考えられる守り神の觀念と本覺思想の浸透が招く政治史・社会思想史的な帰結・問題点、倫理的な帰結・問題点、学術的な帰結・問題点は以下のとおりである。近代に残った信仰は、天皇家と国家の守り神アマテラスを頂点とする国家神道・祭政一致論、祖霊信仰、生き神信仰、すなわち現実的支配関係に対する重視である点。十八世紀以降の日本思想には、殺死という否定的な事象・事実に直面しても、それらを生によって一方的に粉飾する傾向、すなわち殺死という否定的な事象とのまじめな葛藤を回避する傾向が一般的だった点。十八世紀の学問の展開を考えると、日本においては、今の自分自身にとって親和的な過去・起源だけを探して記述するという意味での現状肯定的な解釈学を離れること、すなわち考古学・系譜学的な自己批判を行うことが非常に困難である点。

本稿の見通しでは、日本思想・日本文化を掩う、否定的なものへの感受性の変容・弱体化は、二十世紀、そして現代へと続いている。われわれにとって、否定的なものへの感受性を従来とは逆方向に変容させることが政治上、倫理上、学問上火急の課題である、と結論づけたい。